

令和 4 年度 自己点検・評価書

令和 5 年 7 月

佐賀大学

肥前セラミック研究センター

I 現況及び特徴

佐賀大学は COC (Center of Community) として地域貢献を推進する大学を目指し、次の 100 年を担う窯業人材育成のため、平成 25 年に佐賀県と協力協定を結んだ。その後、平成 28 年 4 月に芸術地域デザイン学部を設置し、佐賀県立有田窯業大学校を統合し、佐賀大学有田キャンパスを発足すると同時に、肥前窯業圏の研究を中心とした地域貢献を目的とした肥前セラミック研究センターを設置した。

このような背景と現在の地域状況を考慮し、佐賀大学の基本的な役割は、肥前窯業の永続性を支える研究と教育であるということを再認識し、本学で平成 28 年 12 月に策定された中期計画カルテとアクションプランに基づき、肥前セラミック研究センターの設置に伴う機能強化経費等プロジェクト実行経費事業「やきものイノベーションによる地域共創プロジェクト」の推進強化を行った。

肥前セラミック研究センターは、プロダクトデザイン・アート研究部門、セラミックサイエンス研究部門、マネジメント研究部門の 3 つの研究部門から構成され、平成 4 年度には、それぞれ、4 名、11 名、6 名の教職員が在籍した。そのうち、3 名（特任教授（非常勤）、准教授、助教）が専任教員、15 名が併任教員であり、残り 3 名が協力教員であった。さらに、4 名の客員研究員（学外 3 名、本学名誉教授 1 名）が在籍した。

令和 5 年 4 月からの体制は、プロダクトデザイン・アート研究部門 4 名、セラミックサイエンス研究部門 9 名、マネジメント研究部門 4 名の 17 名の教職員が在籍する。そのうち 3 名（特任教授、准教授、博士研究員）が専任教員、14 名が併任教員である。

【根拠資料 1】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和 4 年度版

II 目的

肥前セラミック研究センターは、肥前陶磁の伝統的技術・工芸とファインセラミックスの先進技術要素を組み合わせた「やきものイノベーション」により、佐賀大学の研究教育活動及び学内外との学術交流の促進を図り、地域社会の持続的発展に資することを目的とする。

【根拠資料 1】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和 4 年度版

【根拠資料 2】 佐賀大学肥前セラミック研究センター規則

III—I 教育に関する状況と自己評価

(1) 学部生、大学院生への教育「未来を拓く材料の科学Ⅱ」

特任教授が全学教育機構のインターフェース科目の「未来を拓く材料の科学Ⅱ」において陶磁器のサイエンスに関する講義、陶磁器絵の具材料を調合する深海商店の深海宗佑氏による講演、有田窯業技術センター見学などを本学学部生 86 人に行った。

(2) 研究成果の教育への反映

本センターの研究に関連して教育を行い研究テーマとして捉えた学生は、プロダクトデザイン・アート研究部門 33 名、セラミックサイエンス研究部門は、修士課程 7 名学部 8 名、マネジメント研究部門は修士課程 1 名の計 49 名。

センターの研究成果を大学教育に反映させることを目的とし、センターの研究成果を芸術地域デザイン学部の学生に知ってもらって将来の作品制作に活かしてもらうために、セラミックサイエンス研究部門で開発した新素材に関する講義と実演を併任教員が行った。

(3) 「肥前セラミック学」開講

令和 4 年度から、本学学部生を対象とした全学教育機構の全学教育科目（基本教養科目（自然科学と技術の分野））「肥前セラミック学」を開講した。本庄キャンパスでの陶磁器に関する講義やセラミックスに関する化学実験とともに、有田キャンパスでの陶磁器の制作体験や、有田町のフィールドワークも含んだものとなっており、3 研究部門の特徴を統合したセンターならではの講義となっている。

(4) 陶磁器アイデアコンテストの実施

本学と肥前窯業圏との連携による「やきものイノベーション」を行うべく、大学教育の一環として、陶磁器アイデアコンテスト「生活を豊かにする陶磁器・セラミックス」を実施した。応募総数 66 件、1 次審査(2022. 12. 27)、2 次審査(2023. 1. 22)の後最終審査と表彰を行った。

(5) 佐賀県立神崎高校ジョイントセミナー

高校 2 年生 12 名を対象に、「焼き物について」の講演を行った。

(6) 肥前地区キャリア教育プログラム

本学学生を対象に、日本ハードメタル(株)（武雄市立花工場・北方工場）の企業見学、を行った。(2022. 9. 23)

(7) キャリア教育支援事業「ファインセラミックスについて ～セラミックスってどんな材料？～ やきものとファインセラミックスの違い？」の実施

佐賀県立有田工業高等学校の学生を対象として、併任教員がファインセラミックスとは何かを理解してもらうことを目的とした講義を行った。受講者 43 名。(2022. 7. 6)

(8) 「ARITA でリケフェス」 プチプチ！コロコロ！癒しのセンサリーボトル

本学ダイバーシティ推進室主催。有田町炎の博記念堂にて実施。

【根拠資料】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和 4 年度版

【自己評価】

芸術地域デザイン学部、経済学部、理工学部、理工学研究科、全学教育機構等との連携においてセンターの研究に関連する学生指導を通して教育に貢献しており、評価できる。今後も学部・研究科との連携を深めて教育に貢献する。前年度に引き続き、本学学生以外の地域住民や高校生に対して、公開講座等を通して、センターの研究領域に基づく教育や地域貢献の観点からの教育支援を実施できたことも評価できる。

前年度からの教育活動に関する改善点として、「異分野融合型のセンターの特徴を生かしたさらなる大学教育への貢献を考えて実行する」に対し、(1) (3) (4) は特に有効に働いた。今後第 4 期は部門連携の取り組み事項を更に明確にし、それぞれの研究、教育に関わっていくよう取り組みを整えている。

まとめ

○優れた点

- ・研究成果の教育（講義）への反映、アイデアコンテストの実施、「肥前セラミック学」の開講、インターフェース科目の「未来を拓く材料の科学Ⅱ」など、異分野融合型のセンターの特徴を生かした大学教育への貢献ができた。
- ・本学学生以外の地域住民や高校生に対して、公開講座等を通して、センターの研究領域に基づく教育や地域貢献の観点からの教育支援を行った。

○改善を要する事項及び改善状況

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
<ul style="list-style-type: none">・「肥前セラミック学」の異分野のオムニバス授業の一貫性。・アイデアコンテストの地域の窯業関係者の意見の反映。	異分野融合型のセンターの特徴を生かした大学教育への貢献が必要とされていたが、焼き物を通じた異分野融合型の研究成果の講義への反映、アイデアコンテストの実施、新科目の開設など、改善できた。	<input type="checkbox"/> 検討中 <input type="checkbox"/> 対応中 <input checked="" type="checkbox"/> 対応済 <input type="checkbox"/> その他 ()

IV—I 研究に関する状況と自己評価

(1) 研究成果の概要

学術発表 43 件（学会発表や学術講演等）

学術論文等掲載 10 件（著書、論文、解説等）

プロトタイプ発表 234 件（教員の外部発表作品及び、指導学生と有田陶交会との協働

試作品、JSPS プログラムの研究者の作品）

共同研究・受託研究・秘密保持契約等 4 件

地域連携協定 1 件（H29～九州陶磁文化館、佐賀県窯業技術センター、芸術地域デザイン
学部）

国際研究交流協定 1 件（H30～韓国窯業技術院 Icheon 分院） 研究連携協定 1 件（H30
～甲南大学ビジネス・イノベーション研究所）

(2) 各教員の研究課題及び共同研究相手

次ページに、研究課題等の一覧表を示す。プロダクトデザイン・アート研究部門で 5 テーマ、セラミックサイエンス研究部門で 19 テーマ、マネジメント研究部門で 10 テーマの研究が実施され、佐賀県窯業技術センター、有田工業高等学校、有田町歴史民俗資料館、泉山磁石場組合、長崎県立大学、地元企業等の肥前地区の窯業関連機関とともに、景德鎮陶磁大学、甲南大学、原子力研究開発機構、民間企業等との協働での研究活動を行った。研究テーマの多くは肥前地区の窯業関係機関とともに行われており、地域に密着した研究が実施されていることがわかる。

表 各教員の研究テーマ一覧表

部門	教 員	研究課題	連携相手
プロダクトデザイン・アート 研究部門	田中	焼成時無収縮磁器土による成形法開発と造形表現への応用	佐賀県窯業技術センター
	三木	3D デジタルデザインツールを用いた陶磁器製品開発	企業 1 社
	三木	陶磁器成形技法研究(自硬鉛込み成形の陶磁器作品『陶磁器性立体 QR コード』への応用と有田町内設置)	佐賀県立有田工業高校、企業 1 社
	湯之原	異素材を利用した陶磁器表現の研究	佐賀県窯業技術センター
	甲斐	焼成無収縮陶土の手造り(ロクロ等)による利活用の研究	佐賀県窯業技術センター
セラミックサイエンス研究部門	矢田・一ノ瀬	完全無収縮陶磁器の開発	佐賀県窯業技術センター
	一ノ瀬・矢田	陶磁器成形技術の開発と応用	企業 1 社
	一ノ瀬・矢田	ペルオキソチタン錯体の応用研究	企業 2 社
	一ノ瀬・矢田	陶片・陶土・陶石の機器分析研究	武雄市 企業 1 社
	近藤	泉山粘土と天草粘土の物理・化学性および可塑性の比較検討	佐賀県窯業技術センター 企業 1 社
	海野	近赤外ラマン散乱およびルミネッセンスを用いた古陶磁器の産地同定法に関する研究	佐賀県窯業技術センター 有田町歴史民俗資料館
	赤津・HAO	強化磁器の強化メカニズムの解明と新規強度設計	佐賀県窯業技術センター
	赤津・HAO	焼成変形しにくい磁器素地の開発	佐賀県窯業技術センター
	赤津・HAO	磁器素地の焼成収縮抑制メカニズムの解明	佐賀県窯業技術センター
	川喜田	セラミックス層導入円管チューブによる生体分子・粒子の分離	
	川喜田	ゲル層の弾性を利用してセラミックス粒子の分離	
	川喜田	泉山陶石の有効利用に関する研究	佐賀県窯業技術センター 泉山磁石場組合 企業 1 社
	成田・磯野 矢田・一ノ瀬	有機無機ハイブリッド陶磁器	佐賀県窯業技術センター
	根上	陶磁器廃材・廃素焼き片・廃石膏型枠の有効利用に関する研究	企業 1 社
	磯野	セラミック系電極材料の開発	

部門	教 員	研究課題	連携相手
マネジメント研究部門	三沢・赤津・HAO	IH(誘導加熱)に対応する有田磁器製の病院・介護施設給食用食器の開発	企業 1 社
	三沢	FEM による SPS 温度分布評価	文部科学省国家課題対応型研究開発推進事業「原子力システム研究開発事業」採択課題 「3D 造形革新燃料製造のシミュレーション基盤技術」サブテーマ
	三沢	放電プラズマ焼結による原子炉燃料製造プロセスシミュレーションの研究	原子力研究開発機構 企業 1 社
	HAO	新機能セラミックス材料の創製	佐賀県窯業技術センター 景德鎮陶瓷大学
客員研究員	山口	陶磁器に関する消費者行動調査・研究	長崎県立大学
	山口	地域創生マーケティングに関する研究	甲南大学
	有馬	統計データをもじいた有田町訪問者の特性	
	山本	肥前陶磁器業の歴史研究	
	栗林	有田町における戦後農業の展開に関する研究	
	洪	地域資源を活用したブランド化とその効果に関する研究	
	洪	グローバル化に向けた地域ブランド育成方法と政策的課題	
	本田	観光消費の向上を目的とした有田焼手ぬぐいの開発	佐賀県立有田工業高校
	本田	岳の棚田における交流人口増加を目的としたイベント開催のあり方の実践的研究	佐賀県立有田工業高校
	本田	窯業(有田焼)と芸術分野(いけばな草月流)のコラボレーションによる新たな芸術表現の創出と新規市場参入の取組における実践的研究	企業 1 社

【根拠資料】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和 4 年度版

【自己評価】

令和4年度は、学術発表件数は昨年の44件から43件に微減したが、概ね順調に学術発表ができたと思われ、更に件数を上げることが望まれる。学術論文等掲載が昨年の17件から10件と減少したことは、改めて研究成果の着実な積み上げの努力が必要である。プロトタイプ発表は昨年の34件に対し234件と増加しており、学生や教員のプロトタイプ・作品発表は積極的に行われている。

また、研究の質の観点では、セラミックサイエンス研究部門による「古磁器の科学的分析に関する研究～シンクロトロン光およびラマン光による肥前陶磁器の分析と産地推定」は、連携研究機関の高い評価を受け、更に連携し研究を進める。

また、プロダクトデザイン・アート研究部門による東京ドーム「テーブルウェアフェスティバル 2023 に『陶磁器製立体 QR コード』を佐賀県の要請で出展(2023. 1. 27)、有田の窯元との陶交会九州陶磁文化館年次展(2023. 3. 1)のプロトタイプ制作研究の取り組み、東京ミッドタウン・デザインハブ主催の第101回企画展「ゼミ展 2023」(2022. 12. 12)に選出され出展し好評であった。

そしてマネジメント研究部門は、有田キャンパスや博多阪急にて「Arita × Sougetsu いけばな展覧会(2022. 5. 19～24)を開催し、窯元の新しい商品展開を誘導した。また、佐賀県と佐賀大学が主催した「TSUNAGI プロジェクト」(2023. 3. 18)では体験ワークショップによるデザインを軸とした地域との協働プロジェクトを展開した。

東京の草月会館で発表した ARITA × SOGETSU プロジェクト（有田焼といけばな草月流による協働での花器制作）は大変好評であり、2021. 5. 19～5. 24 に博多阪急で開催された「草月いけばな展」でも制作した作品が展示され、セラミックサイエンス研究部門からは「新型コロナ不活性化を確認 佐大教授らコーティング剤開発」とのタイトルで研究成果が佐賀新聞(2021. 8. 11)で紹介され、マネジメント研究部門からは令和3年度末に刊行した「肥前窯業圏における陶磁器に関する消費者意識調査報告書」の内容が朝日新聞(2022. 4. 28)にて紹介されるなど、研究成果の質の向上による評価の高まりも見られる。

また、前年の課題であった、部門間の連携を密にして新しい研究成果を出していくことについて、オンライン開催の国際セミナー「やきもの産地のまちづくり」(2022. 9. 27)や「伝統的磁器の最近の発展」(2022. 12. 5)、「ARITA × SOGETSU やきものと生け花による新しい芸術表現の創造」(2022. 10. 29～11. 2)、国際シンポジウム「日中韓における陶磁器ブランド戦略」等、各部門が連携し開催した。加えて、JSPS サマープログラム研究者の受け入れにより、有田焼産業の特質について海外からの目線の研究がなされたことは有意義であった。

更に異分野融合領域のセンターの特徴を生かした研究活動を続けていく必要がある。

まとめ

○優れた点・特色ある点

- ・地域と連携した多くの研究が実施されている。
- ・質の高い研究成果が出てきており、「古陶磁器の科学的分析に関する研究」や、東京での展覧会等（東京ドーム「テーブルウェアフェスティバル 2023『陶磁器製立体 QR コード』出展や、東京ミッドタウン・デザインハブでの「ゼミ展 2023」選出、ARITA × SOGETSU プロジェクト）の開催などインパクトのある研究結果が得られている。

○改善を要する事項及び改善状況

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
異分野融合領域のセンターの特徴を生かした研究活動を続けていく必要がある。	国際セミナー2回、国際シンポジウム1回、内容についても3部門の研究が融合した内容となった。また、サイエンスとアートデザインが融合した自硬鉄込み技術を用いた「やきものの立体 QR コード」が有田駅に設置されるなど、融合型の活動が進んだ。 部門間の連携を密にして新しい研究成果を出すことが望まれており、プロダクトデザイン・アート研究部門を中心とした商品の開発に他部門が関わる取り組みを計画している。	<input type="checkbox"/> 検討中 <input type="checkbox"/> 対応中 <input checked="" type="checkbox"/> 対応済 <input type="checkbox"/> その他 ()

V—I 国際交流及び社会連携・貢献に関する状況と自己評価

(1) 国際交流 国際交流に関して、以下の8項目の協議や研究成果発表等を行った。

1. JSPS サマープログラム研究者 Johanna 氏受入、研究発表、作品展示(2022.4.1～10.21)
2. Pacific Rim 「FUTURE CERAMICS」プロジェクト [多摩美術大学、アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン(米)] レクチャー・ワークショップ (2022.9.13~14)
3. KICET (韓国窯業技術院)・韓国窯業協会連合会、有田キャンパス訪問 (2022.9.22)

4. 国際セミナー「やきもの産地のまちづくり」(2022. 9. 27)
5. 国際セミナー 「伝統磁器の最近の発展」(2022. 12. 5)
6. 国際シンポジウム「日中韓における陶磁器ブランド戦略」(2022. 12. 17)
7. ベツアルエルデザイン美術アカデミー（イスラエル）との交流 プロジェクト「Story Box」展プレゼンテーション(2023. 2. 27)
8. 分子分光学に関する国際研究セミナー開催(2022. 11. 7~9)

(2) 社会連携・貢献

社会連携活動として、地域協働活動が 26 回行われた。また、肥前地区で密接な関連がある佐賀大学芸術地域デザイン学部、九州陶磁文化館、佐賀県窯業技術センターと当センターで四者会議（2023. 3. 29）を、芸術地域デザイン学部と肥前地区の窯業関係者と当センターで地域連絡会（2023. 3. 29）を開催して意見交換を行った。社会貢献活動として、以下に示す研究発表会やシンポジウムや講演会等を開催（主催もしくは共催）した。

①当センターが主催した研究成果発表会・シンポジウム等 12 件

1. 研究成果報告「古磁器の科学的分析に関する研究報告会～シンクロトロン光およびラマン光による有田周辺磁器の評価研究中間報告～」(2022. 7. 26)
2. 地域経済の課題解決に取り組む R (Region) プロジェクト大会 (2022. 8. 6)
3. 国際セミナー「やきもの産地のまちづくり」(2022. 9. 27)
4. 「ARITA×SOGETSU やきものといけばなによる新しい芸術表現の創造」(2022. 10. 29~11. 1)
5. 「ひまわりめいろ in 岳の棚田」(2021. 11. 12~12. 20)
6. 肥前セラミック研究センター研究成果ポスター発表会(2022. 3. 29)
7. 国際セミナー「伝統的磁器の最近の発展」(2022. 12. 5)
8. 国際シンポジウム「日中韓における陶磁器ブランド戦略」(2022. 12. 17)
9. 「お正月飾り」ワークショップ(2022. 12. 25~26)
10. 陶磁器アイデアコンテスト(2022. 12. 1~23)
11. 有田町歴史民俗資料館への古陶磁分析に関する研究経過報告会 (2023. 3. 27)
12. 「石膏型成型Ⅱ」肥前窯業圏の排泥鋳込み成型技法を用いた習作展『大切なものを收める』(2022. 6. 17~7. 15)

②センターが共催となった講演会・セミナー、センター教員が関与した社会貢献 14 件

1. まち歩き in 肥前浜宿 (2022. 5. 21)
2. 令和 4 年九州都市学会秋季例会 (2022. 1. 26)
3. 陶交会×佐賀大学 PROJECT 展示『roots』(2023. 3. 7~12)
4. 「ARITA×SOGETHU」草月いけばな展 (2022. 5. 19~24)
5. JSPS サマープログラム研究者受け入れ (2022. 4. 1~10. 21)
6. 突展 2022(福岡教育大学美術科卒業有志展)出品 (2022. 6. 28~7. 3)
7. 「AI・IoT・DX、ロボット技術を活用した新規事業とスマート農業事業」 (2022. 7. 5)
8. 日本マーケティング学会サロン「2025 年のマーケティング・アジェンダ」(学会)
(2021. 5. 24)
9. PacificRim 「FUTURE CERAMICS」プロジェクト
[多摩美術大学、アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン (米)] レクチャー・ワーク
ショップ (2022. 9. 13. 9. 14)
10. 分子分光学に関する国際研究セミナー開催 (公開型講演会、研究成果) (2022. 11. 7~9)
11. 東京ミッドタウン・デザインハブ 第 101 回企画展「ゼミ展 2023」(2023. 1. 10~2. 12)
12. テーブルウェア・フェスティバル 2023～暮らしを彩る器展～企画展：有田焼ブース出
展(2023. 1. 27~2. 5)
13. TSUNAGI プロジェクト (体験ワークショップ) デザインを軸とした地域との協働プロ
ジェクト～有田町における取組～(2023. 3. 18)
14. イスラエル ベツアルエル美術デザインアカデミー交流プロジェクト「Story Box」プ
レゼンテーション(2023. 2. 27)

【根拠資料】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和 4 年度版

【自己評価】

国際交流に関しては、令和 3 年度と同じく 8 件。これらの活動の多くは有田キャンパスの教員によって行われており、有田キャンパスの国際化や地域活性化へ貢献できている。前年度の自己点検・評価書において、改善を要する点の、センター主催の国際セミナー開催等の主体的な活動が望まれる点は、令和 4 年度は外国籍の専任教員を中心として 3 回の国際セ

ミナー・シンポジウムを開催できた。セラミックサイエンス研究部門の内容にとどまらず、アートデザイン、マネジメントの内容も含め行われ、焼き物に関する専門性を共有した。定期的な開催が望まれる。また、イスラエル ベツアルエル美術デザインアカデミー交流は、共同の授業、展覧会の開催は2回目となり、益々相互理解が深まっており、引き続き交流を深めていく。

社会連携・貢献に関しては26件、地域協働活動地域の様々な活動に参画できていることがわかる。また、四者会議と地域連絡会（2023.3.29）を通して、センターの活動に対する意見を伺い、次年度の活動に反映している。例として、九州陶磁文化館、有田町歴史民俗資料館から研究が好評であった「陶片の機器分析に関する研究成果発表」（2021.11.22）は、研究成果報告「古磁器の科学的分析に関する研究報告会～シンクロトロン光およびラマン光による有田周辺磁器の評価研究中間報告～」（2022.7.26）に繋がり、研究が進展している。今後もこれらの会議での意見や要望を取り入れてセンターの活動を改善していきたい。

以上のように、地域に密着した活動としての地域協働活動は有田キャンパスの専任教員を中心に担ってくれており、地域と大学を結ぶ重要な役割を果たしているといえる。

また、昨年度の反省に、活動の発信状況を上げられたが、今年度は、プレスリリース29件、メディア掲載14件と、研究や活動の周知も積極的に行なった。

【根拠資料】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和4年度版

まとめ

○優れた点

- ・センター主催の国際セミナー・シンポジウムを3回開催し、大学や地域の国際化に貢献した。
- ・国際交流、社会連携・貢献行事に一定の評価を得る結果が認められる。センターの活動の活性化が認められる。

○改善を要する事項及び改善状況

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
国際的なネットワークの構築、国際交流において国際セミナー開催等の主体的な活動が望まれていたが、国際シンポジウムの主催がなかった。	R4年度は3回の国際セミナー・シンポジウムを主催し、改善できた。	<input type="checkbox"/> 検討中 <input type="checkbox"/> 対応中 <input checked="" type="checkbox"/> 対応済 <input type="checkbox"/> その他 ()

VI—I 組織運営・施設・その他部局の重要な取組に関する状況と自己評価

(1) 組織運営

令和3年度までの組織運営を見直し、正・副センター長、専任教員3名、URA担当員1名からなる企画会議により、センターの活動や予算執行計画、センターが抱える課題の共有と解決に向けた議論を行うようにした。令和4年度は、本センター運営委員会5回、企画会議5回、センター長・副センター長会議3回、四者会議1回で、運営に関する協議と評価を行った。有田連絡会で芸術地域デザイン学部と有田キャンパス運営と地域に対する対応などの意思疎通を図り、FD・SD研修会で有田焼産業についての意識共有を図った。また、研究・社会連携・国際担当理事ともセンターの活動の方向性について協議した。第4期の活動計画に向け、令和5年度は、センター長をプロダクトデザイン・アート研究部門から選出し、副センター長1名、各部門長、専任教員、URA担当員、研究推進課が運営に関わる。一方、令和5年度から本センター職員が、セラミックサイエンス研究部門11名から9名、マネジメント研究部門6名から4名に減少。研究教員の戦力減少と、令和5年度任用満期の専任教員(令和5年度は非常勤博士研究員)、令和6年度の専任の准教授の更新未定と、本センターの活動の要となる専任教員3名中2名の来年以降の戦力減少に対策が必要である。

(2) その他部局の重要な取り組み

セラミックサイエンス研究部門は「肥前古磁器のシンクロトロン光及びラマン光による分析と産地推定」、プロダクトデザイン・アート研究部門は「やきものの立体QRコード」や、「東京ミッドタウンデザインハブでの展覧会」「イスラエルベツアルエルデザインアカデミーとの交流」、マネジメント研究部門は「Arita×Sougetsuいけばな展」や「肥前窯業圏における陶磁器に関する消費者意識調査報告書」など3部門それぞれ、有効な研究結果が見られたと共に、昨年度までの件案であった、3部門間の連携強化については、国際セミナー2回、国際シンポジウム1回、内容についても3部門の研究が融合した内容となった。また、サイエンスとアートデザインが融合した自硬鉄込み技術を用いた「やきものの立体QRコード」が有田駅に設置されるなど、融合型の活動が進んだ。更に、3部門間の連携強化を図るために、第4期目は、それぞれの部門の研究に加え、プロダクトデザイン・アート研究部門が手掛ける有田焼のデザイン面での新領域の開発に、他の2部門の研究を融合する体制の新しい研究を加える。

【根拠資料】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和4年度版

【自己評価】

各部門それぞれ一定の研究成果を上げると共に、件案であった3部門が連携した本センターならではの取り組みについては、国際セミナーや国際シンポジウムの開催、「やきもの立体QRコード」等の設置で成果を見たが、更に3部門の連携の強化で革新的な研究につなげたい。そのためには、3部門の専門であるリサーチ・マネジメント・テクノロジー・デザインについて、それぞれの力を結集し研究にあたる必要がある。センターの活動計画に沿った運営を心掛ける。

まとめ

○優れた点・特色ある点

- ・プロダクトデザイン・アート研究部門は「やきものの立体QRコード」や、「東京ミッドタウンデザインハブでの展覧会」、セラミックサイエンス研究部門は「肥前古磁器のシンクロトロン光及びラマン光による分析と産地推定」、マネジメント研究部門は「Arita × Sougetsu いけばな展」や「肥前窯業圏における陶磁器に関する消費者意識調査報告書」と3部門共に、それぞれの領域で一定の成果を挙げた。
- ・3研究部門が連携し国際セミナー2回、国際シンポジウム1回開催し、日中韓の研究機関と連携した研究を継続している。また、イスラエル・ベツアルエルデザインアカデミーとの交流、オランダアントホーヘンデザインアカデミー、ドイツブルグギビヒエンシュタインデザイン芸術大学との交流等、国際的なネットワークを活かし、活動している。

○改善を要する事項及び改善状況

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
センターの活動を積極的に推進する専任教員3名のうち、専任教員(令和5年より非常勤博士研究員)は令和5年度まで任期満了、専任准教授も令和6年度更新は決まっていない。今年度人事を進めないと3分野融合の活動の戦力が大幅に減少する。	専任の助教の採用と専任准教授の来年度の更新を求めたい。	<input checked="" type="checkbox"/> 検討中 <input type="checkbox"/> 対応中 <input type="checkbox"/> 対応済 <input type="checkbox"/> その他 ()

VI-II 明らかになった課題等に対する改善の状況又は改善の方策

改善すべき点1：異分野融合型のセンターの特徴を生かした、さらなる大学教育への貢献を考えて実行する必要がある。（令和2年度自己点検・評価書）

対応1：「III-I 教育に関する状況と自己評価」の（2）研究成果の教育への反映、（3）

「肥前セラミック学」開講、（4）陶磁器アイデアコンテストの実施に記載の通り、異分野融合型のセンターの特徴を生かした教育を実施することができており、改善すべき点を解決している。

改善すべき点2：センターが設立されて5年目になるが、各研究部門がそれぞれ独自に研究を実施しているだけであり、当初に理想・目標としていた「芸術の科学の融合によるやきものイノベーション」、3研究部門間の協働でのシナジー効果による新しい研究成果の創出を達成するには至っていないことがあげられる。R3年度は部門間の連携を密にして新しい研究成果を出していくことが望まれる。（令和2年度自己点検・評価書）

対応2：「IV-I 研究に関する状況と自己評価」

3部門間の連携強化については、国際セミナー2回、国際シンポジウム1回、内容についても3部門の研究が融合した内容となった。また、サイエンスとアート・デザインが融合した自硬鑄込み技術を用いた「やきものの立体QRコード」が有田駅に設置されるなど、融合型の活動が進んだ。更に、3部門間の連携強化を図るために、第4期目は、それぞれの部門の進行中の研究に加え、プロダクトデザイン・アート研究部門が手掛ける有田焼のデザイン面での新領域の開発に、他の2部門の研究を融合する体制の新しい研究を加える。

改善すべき点3：改善を要する点としては、センターが設立されて5年目であるが、センターが主体となって開催した国際交流行事がないことである。令和2年度11月に着任した外国籍の助教を中心としたセンター主催の国際セミナー開催等の主体的な活動が望まれる。

（令和2年度自己点検・評価書）

対応3：「V-I 国際交流及び社会連携・貢献に関する状況と自己評価」の（1）国際交流の欄に記載した2回の国際セミナー（「伝統磁器の最近の発展」（2022.12.5）、「やきもの産地の街づくり」（2022.9.27））、国際シンポジウム「日中韓における陶磁器ブランド戦略」

（2022.12.17）がセンター主催の国際交流行事であり改善した。今後も主体的な国際交流活動を行う。